

# 石川啄木研究

岡田浩恵

## 目次

はじめに

本論

### 第一章 啄木の大衆性

#### 第二章 明治の青年

第一節 妻・節子について

第二節 教育者としての啄木

第三節 生と死の考察

#### 第三章 自由への欲求

第一節 生活と文学

第二節 大逆事件のとらえ方

第三節 明日の考察について

おわりに

## はじめに

石川啄木、彼の名は、今や中学・高校の教科書には必ずといっていいほど取りあげられていて、知らぬ人はいないだろう。私自身、

国語の授業を通して、その名や歌を知った。「ふるさと」「貧困」「涙」……。私にとって、その歌は、感傷的な、しかし命の一秒一秒をいとおしむ様な、そんな素直で透明感のするものだった。

その歌にひかれ、石川啄木を卒論のテーマに選び、彼の年譜をたどっていくうちに私はその波乱の人生に驚いた。人生において「死」はいつの世でも感動的であるが、彼の場合は、わずか二十七年の生涯を、常に前向きに、特に晩年の数年間は、借金を重ねなければならぬ程の貧しさの中で、その文学は社会に十分には認められておらず、さらに、家庭内における嫁姑の争い、病魔との闘いという悪条件にさいなまれてながらも、社会の矛盾に目を向け、自由を願い、明日を信じて生きた。その結果の死である。私はそこに、永遠に若くそして力強い「明治の青年」を見た様な気がする。

明治四十五年四月十三日、彼が没して以来その著書をはじめとして、関係資料は、星の数にもものぼり、多方面からの研究がなされている。そこで私は、この論文において「明治の青年」としての啄木像」に中心テーマを置きその大衆性、生涯、そして作品、思想について考察していきたいと思う。

なお、本文に引用する、啄木の作品については、「石川啄木全集」

(筑摩書房)によった。

## 第一章 啄木の大衆性

石川啄木、その名を耳にした時、人々は何を連想するだろうか。

「天折」の二文字であろうか、額の広い童顔であろうか、それとも「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ちっと手を見る」<sup>△</sup>とか「いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ」<sup>▽</sup>などの歌だろうか。

とにかく、彼の名は、歌は、広く愛され、うたわれている。そして今や日本のみでなくソ連・アメリカ・イギリス・フランスなどの世界にまで、その詩集が出版される程になっている。それは、フランスの詩人、ルネ・ギルが、その部屋の壁に、フランス語に訳された啄木の「△東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」<sup>▽</sup>の歌を掲げ、それを指さし、小声に口ずさみ「実にいい詩だ短かい詩だが、まことに悲しく美しい。」<sup>△</sup>と云って、涙をにじませていた。(『民主文化』一九四六年七月号)ということによっても、あきらかであろう。

私は彼につけられた数々のキャッチフレーズの中で、「青春詩人」という言葉が一番好きだ。青春、それはいろいろな可能性を秘め、同様に絶望や挫折をも秘めている。そんな青春を、啄木は身をもって体験し、悩みや苦しみの中で身もたえする若い青春の情熱に「歌」などの「形」を与えたのである。そして青春を裏切ることなく青春のままに倒れた。

啄木の波瀾の人生、美しく清らかな風貌、永久に若い面影と共に、彼が我々に残した、誰でもが日常経験する様な青春の感情をうたった作品は、我々に限りない共感をよびます。他人をうたう啄木は他人の中に自分をもつけ、自分をうたう啄木の中に、私は私自身をもつけた様な心持ちがするのである。

そんな心境を『一握の砂』における藪野棕十の序文は、

「これ面白い、ふんこの刹那の心を常住に持てる事が出来たら、至極じゃ。面白いところに気が着いたものじゃ、面白く言いまわしたものじゃ。……そうじゃ、そんなことがある。こういう様な想いは、俺にもある。二三十年もかけはなれたこの著者とこの読者との間にすら共通の感じやから、定めし総ての人にもあるのじゃろう。」

(『石川啄木全集』一卷より)

という言葉で、端的明快にあらわしている。

また、その大衆性として彼には「悲しみ」「涙」によって共感を誘うという点のみでなく、少年期からの社会正義感と、新聞記者の経験から得た社会を見る目による、文明批評家的性格があげられる。

岡邦雄は、その著書『若き石川啄木』の中で啄木における大衆性の要素を

「(一)彼の個人的魅力、(二)その独自の表現様式(その短歌のスタイル)、(三)その芸術に一杯に滲み出しているベースがあげら

れるが、それに附加えて、(例)彼が既に新聞記者時代に身につけた鋭い政治的センスにもとづく、何か民族の明日の生活を予見すると言ったような、将来性とても呼ぶべきものが考えられる。そして(→)から(例)に至るすべての特性に彼の芸術家的、また人間的誠実さが裏づけされている。」

と述べ、特に(例)を取りあげて

「これこそ啄木の芸術の最もハッキリした特性であり、従つて彼の大衆性の最大の要因をなすものと考えられる」

と指摘している。これらは、啄木の人と文学における大衆性的確かな分析であると思うと同時に、特に(例)の要素については、力強い明治の青年としての啄木を見る思いがするのである。

世には、文学の中に「純文学」と「大衆文学」との区別をつくり、そして「大衆文学」を軽く見る人々がいる。そしてそれらの人々は、啄木の「涙」「悲しみ」などの面のみをとりあげて、その大衆性を軽んじる。しかし真の啄木の価値は、前記岡邦雄氏の言う通りであり、それらは当時の人々のみではなく何十年もかけはなれた我々、そして外国の人々の心までも揺さぶるものなのである。その様に、啄木の文学における大衆性は、「純文学」「大衆文学」の区別を越えた、よき芸術のもつ「真の大衆性」といえると思う。

## 第二章 明治の青年

### 第一節 妻・節子について

啄木の二十六年二カ月の人生の中で、彼は十九才で結婚しているので、七年間、恋愛期間を入れると、十三年間、つまり人生の半分を節子と共に生きたと言えると思う。

しかし実際には、妻以外の女性に心惹かれたことが少なからずあった。その代表的な人としてあげられるのは、函館時代の同僚で、女教師・橘智恵子であろう。彼女については

#### 山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君を思へり

などに代表される、二十首近い歌もよまれており、さらに日記にも

「橘智恵君は真直に立てる鹿ノ子百合なるべし」

(明治四十年九月四日)

とその印象を述べさらにローマ字日記においても

「ちえこ さん、なんと いい なまえ だろう? ……」

(明治四十二年四月九日)

と記されており、啄木の清純な恋心がよみとれるのである。

また他に、堀田秀子・植木貢子・瀬川もと子・石川綱子・小奴・管原芳子に心惹かれ、そして浅草、塔下苑の女性たちと関係をもっていたことが知られている。

といつてもやはりその愛情の中心にあったのは最初にも述べた通り、節子だと思われる。そこで節子の年譜をたどってみよう。

節子（堀合節子）は、明治十九年十月十四日、父忠操、母トキの長女として生まれた。生家は裕福とまでいかなかったが、父が明治三十年十一月士族に編入され、また岩手郡役所に勤務していたので、比較的恵まれた生活で、彼女は両親の寵愛を一身に集めて豊かな環境のもとに健やかに生長した。

啄木との出合いは諸説があるが、明治三十二年、啄木が盛岡中学二年、節子が私立盛岡女学校二年の時と思われる。そして明治三十四年には、二人の関係は、当時の友人、佐藤善助をして

「単純な愛でなくてもっと深い肉に根ざした恋の花は、真紅に二人の胸にさきくうてゐた。石川君は若い女性を完全に握つたと云ふ喜びと誇りで目をかがやかして居た。」

（岩手日報、昭和三年五月二十六日）

と言わせ、また節子の友人、和久井のぶ子をして

「盛岡女学校四年二期頃から節子さんはサボってよく一さん（啄木）の下宿に短歌を教はりに行つてゐるなど、などが評判され

ました。」

（岩手日報、昭和十年四月六日）

といわれたほどに進んでいたとみられる。

その恋は双方の親の反対などにあつたが、それも結局、二人の前に折れ、婚約のはこびとなる。その日、明治三十年一月十四日の日記には

「田村姉より来書あり。余がせつ子と結婚の一件また確定の由報じ来る。待ちにまちたる吉報にして、しかも亦忽然の思あり。ほゝゝみ自ら禁せず。友と二人して希望の年は来りぬと絶叫す。」

とあり、啄木の喜びが素直に表われている。しかしその結婚は、上京中の啄木は帰つてこないままの花婿不在の結婚式。そんな中でも、一人節子は啄木を信じきつておちついてゐたといわれる。

その後、啄木・節子・両親・光子（啄木の妹）との生活が始まるのであるが、結婚以前に起つた、啄木の父一禎の宝徳寺住職の地位罷免（明治三十七年十二月二十六日付）により、一家五人の生活は、当時十九歳の啄木の肩にかかってくる。月給八円の代用教員生活、北海道流浪、長女京子の誕生と、その生活は貧窮をきわめ、その生活たてなおすと、文学への情熱を捨てきれないため、啄木は単身上京してしまふ。

「小生は小生の小説に就いて自信あり。」と明治三十九年八月十

六日、小笠原謙吉宛書簡において明記し、また「夏目の『眞美人草』なら一カ月で書ける」(明治四十一年五月八日、日記)という自信はあったが、その小説はいつこうに売れず、上京して十カ月目、ついに小説家たることをあきらめ、朝日新聞社へ校正係として入社。そして家族が六月十六日上京してきて、一年半ぶりに再会するのである。

結婚して四年目、啄木は経済的にも苦しく、自由がなくなり一家の生活の責任が再び自分にかかってくるという理由をもって、不安な再会であったが、節子にとっては一日千秋の思いで待った日であったろう。しかしその節子が上京の半月後には盛岡の妹にあてて、その生活のつらさを訴えている。

「元氣はないし、ひどくやせ、かぎりなくねむかったり、かぎりなく目がさめてねむられなかつたりする。多分神経衰弱だらう。こればかりならまだいいが右の胸が肩からあばらの処まで痛い。……私には少しもひまがない。ほんとうにかみ結ぶひまさへ得る事の出来ないあはれな女だ。……内のお母さんくらいえちのある人はおそらく天下に二人とあるまいと思ふ。……ほんとうに盛岡からこなければよかつたと思ふよ。東京はまつたにくいやだ。」

(四十二年七月五日、堀合ふき子宛)

この書簡をみてもわかる様に、当時の節子の心は「絶望感」で満たされている。その原因は、身体的な理由と同時に母との確執から

生ずる精神的苦悩——いわゆる「家」の問題であった。そんな中でも節子は、

「ああ夫の愛が命のつなです。愛のない家庭だったら一日も生きてはなりません。私は世のそしりやさまざまにうち勝つた愛の成功者ですけれど、今はかく泣かねばなりません——」

(四十年八月二十七日、宮崎郁雨宛)

と啄木を信頼し、そしてその結婚を後悔してなどないのである。

しかし、このような生活の拳句に、十月二日、節子は京子をつれ、実家へ帰ってしまう。この家出の原因も、「私故に親孝行のあなたをしてお母様に背かせるのが悲しい。私は私の愛を犠牲にして身を退くから、どうか御母様の孝養を全うして下さる様に」という意味の書置(『石川啄木伝』岩城之徳著より)からして、啄木への愛がなくなつたとは考えることは出来ない。つまり、母との折り合いの悪さ、肉体的原因などによると思われる。

この妻の家出に驚いた啄木と彼に泣きつかれた友人、金田一京助の説得によって節子は二十六日には帰宅する。が、帰宅後の生活は節子にとって「忍耐」以外の何ものでもなかつた。啄木からは節子とその親族と関わる事を止められ、母からは金田一の前で節子を横におき、「——この人の為にです。この人の為に本当に本当にひどい目にあひました。一はこの人さへあれば、母などは死んでも好いのでしよう……。」と憎まれ口を言われている。そんな生活を強いられたのであつた。

明治という時代における「女の地位」は、その向上が叫ばれていた——啄木も外面的には、釧路新聞に婦人問題についてふれている——にもかかわらず、一般には江戸時代の封建的なものが存しており、いくら節子自身が、新しい教育を受けていたといえども「家」の制度の中では自己の願いをおさえながら強く生きていかねばならない、そのような明治の「女」の一面を、節子は生きてきたのだと思う。

そんな生活の中で、そしてどんなにつらくとも啄木を信じた節子の愛の中で、啄木もまた苦しみながら「一握の砂」を生み、また、そのような生活を直視しそこから社会に眼を広げることによって、啄木が「実行と観照の問題」「二重生活の統一の問題」を取り出し、掘り下げてゆき、そしてさらに「明日の考察」へと進むことを考えあわせるならば、節子は啄木にとって必要不可欠な存在であり、節子あつての啄木の文学であるともいえるのではないかと思う。

## 第二節 教育者としての啄木

教育者としての啄木の活動期間は、明治三十九年四月十四日から四十年四月十九日までの岩手郡浪民尋常高等小学校の代用教員時代。同年六月十一日から九月十一日までの函館区立立生尋常小学校の代用教員時代と前後一年三カ月という短い間ではない。しかし今日、低学年の非行化、中・高校生による家庭内・校内暴力に代表される教育の荒廃が問われている時、啄木は四分の三世紀も前にこの現状を予見するかの様に教育について深い認識を示しており、ま

た啄木自身にとっても、教育というものの内なる現実をみつめることからその眼を明治国家の社会制度に向けるきっかけを作り、そして「明日の考察」への発展のステップとして、ことから考えるならば、この一年三カ月は啄木にとって大きな意味を持つのではないかと考えられる。

啄木の教員生活は、明治三十九年四月十四日、どう考えても一家五人の生活は不可能と思われる八円の給料で始まった。しかし、

「教育の事に一種の興味を以て居たのは一年二年の短かい間ではない。再昨年あたりから一切を放擲して全たく自分の教育上の理想の爲めに、この一身を委せやうかと思つた事も一度や二度の事ではなかつた。……単に読本や算術や体操を教へたいのではなくて、出来るだけ自分の心の呼吸を故山の子弟の胸奥に吹き込みたい爲めであるのだ。」

(明治三十九年四月十一日～十六日)

と、教育にかける熱意の程を述べている。

それでは啄木はどのような教育を試みたのであろうか。啄木は、その教育活動の様子を明治三十九年五月十一日、小笠原謙吉宛書簡において、

「我が唯一の楽しみは、故山の子弟を教化するの大任也。小生は蓋し日本一の代用教員ならむ。……朝起きて直ちに登校す。

受持は尋常二年也。十分休み毎には卒業生に中等国語読本を教

ふ。放課後は夕刻まで英語の課外教授をなす。一日自分の時間といふものなし。夜は種々の調査、来客等に忙殺せらる。又、時々近隣の女生徒を集めて作文の教授をなすことあり。我が談話を聞かんとする青少年の来襲に逢ふことあり。」

と記している。そして明治三十九年十月十四日の日記には、

「受持の尋常二年の外に高等科の地理・歴史と作文の授業を併せて受持つ事になった。高等科の生徒は非常に喜んで居る。予は代用教員として成功しつつあるのだ。」

と教師たることの自覚と喜びを述べ、また、明治四十年三月二十日の日記には当日の卒業生送別会の様子を、

「この送別会は一切生徒にやらせた——生徒などの招待状で紳士を招くといふのはこの村開闢以来の事である。更にも一つ開闢以来な事は立花委員長の開会の辞に於て、この村の人は初めて「紳士貴女諸君」と呼ばれた事である。……生徒の活動振りの愛らしかった事!! 嗚呼、これも、予が過去一ヶ年間の生活の決して無意味でなかった一つの証拠ではなからうか。」

と記して、生徒への限らない愛情と自分の教育の正しさを確認しているのである。

また、啄木は同時にこの教員生活の間に

「文部省の規定した教授細目は「教育の仮面」にすぎぬのだ。」

(三十九年四月二十四日～二十八日)

「予は現代教育の欠陥が殆んど根底からの欠陥であるという事を感じた。」

(八十日間の記)

と当時の教育を批評しているのである。啄木は子供の自主性を尊重し、そして教師としてあたたくみつめながら、教育という一面において時代という壁に向かっていった。その啄木の姿を見る時、私は彼が「今は日本一の代用教員である」と述べたことを素直に受け入れることが出来るのである。

そこで、啄木の教育観についてふれてみたい。まず彼がいうところの真の教育者とはどの様なものであるのか。彼は小樽日報における「家庭より小学校教師に望む事共」という記事に、

「学科の教授法の巧拙よりも子供に人格としての大きい深い感化を与へて貰ひたいという事」

(明治四十五年十二月七日)

と述べている。啄木はどんな完全な授業よりも、教師の人間性・人格を求めているのである。しかし当時の「教育勸語」を中心とした教育界においては、一個の人間性を主張することは教師のあるべき姿とされなかったことを考えてみるならば、啄木の今にして思えば

何げないこの一言も当時は社会に立ち向う一つの姿であったといえる。

次に啄木は教育の目的について「林中書」において、

「教育の最高目的は、天才を養成する事である。……第二の目的は恂る人生の司祭者に服従し且つ尊敬することを天職とする、健全なる民衆を育てる事である。」

と言っている。ここで「天才」という言葉を用いているが、これは幼い頃神童といわれたが中学を中退し、そして月給八円という代用教員として不遇の生活を送っている啄木の過去を考えあわせるならば「天才」の使用も納得できるが、啄木の本意はこれよりもその直後にある、また本質的には矛盾している様な言葉ではあるが、

「教育の真の目的は「人間」を作る事である。」

(林中書)

という言葉に表われているのではないだろうか。そして啄木が「人間」であることの重要さを考えていることは、評論『弓町より(食ふべき詩)』に述べられている。

「詩人は先第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。」

ということでもあきらかであろう。

また「林中書」の中で、啄木は、日本の教育の欠陥を、

「彼ら「諸先生」は上級の学教に入り、若くは或職業に就く為の資格のみを与ふる一種の機械であらうか。」

などと具体的に指摘している。

これらの啄木の教育観は、現在の教育にもつながり、また今なお同じ問題を抱きつづけていることに、我々は反省をしなければならぬのではなからうか。そして啄木が以上のように、明治という天皇制国家の中でその教育の「根底からの欠陥」を感じとったところに、後の「時代閉塞の現状」そしてその中の「明日の考察」への一過程を認めることが出来ると思う。

### 第三節 生と死の考察

明治の青年として、思想・文学的に、そして人生においても啄木と比較される一人の人物がいる。——北村透谷、その人である。私は透谷との関連において「明治の青年、啄木」を考察していきたいと思う。

北村透谷——明治元年十二月二十九日に生まれ、若くして当時の自由民権運動の波の中に飛び込む。しかしその運動が理想からはずれ暴動化の道を歩もうとはじめた時、彼は政治運動から文学へと手段を変えた。そしてミナ子との恋愛・結婚・生活のゆきづまりな

どを経験しながら、彼は政治へ燃やした情熱を近代的人間性の内部からの確認、内部生命の追求へと、観念的世界へおし進めて行くのである。

それに対し啄木は、浪漫主義詩人として出発し、節子との恋愛・結婚・生活の貧窮と、透谷と同じ様な生涯をたどり、大逆事件を経て社会主義社会実現のための「明日の考察」へと到達するのである。

「政治から文学へ」、と「文学から政治へ」との違いはあるが明治の時代の流れを考えてみるならば、彼ら二人の人生のつながりに明治の文学史、明治の精神史の流れがあると言えるのではないだろうか。

二人をつなぐ契機の一つに百合花がある。

透谷——「折れたまま咲いてみせたる百合の花」

啄木——「けだかき百合の花は下見てぞ咲く。然れども人々よ、よく思へかし。人の目にふれぬ荒野の百合だにも其生ひ立つや、茎は皆天を指す也。」

(一握の砂)

また、啄木は明治三十六年九月十七日付の野村長一宛書簡において、

「透谷の句に、『折れたまま咲いて見せたる百合の花』と云ふのがあるが、芸術の人の尊大なる執着を現して遺憾ないと思ふ

て居る。あゝこの執着があつて初めて、不動なる光明が来るのではないか。喜びや悲しみの底、遥かに人の世の皮相とはなれた所に、無限の喜悅光明の信と云ふ岩根がある。若しこの岩根の上に立って転び落つる事のない人があつたら、たとへ其人の言葉は低く、声はしは枯れてあつても、僕は馳て其人の靴の紐を結ぶであらう。」

と述べ、また明治四十一年一月十五日付の日記にも、

「踏み躪られても折れた儘で下むく美しい花を開く百合の花……」

と述べている。このことは啄木において、透谷の影響が少なからずあつたことを示しているといえよう。

右の様に二人をつなぐ百合の花の形象には、また「冬の時代」といわれる明治社会を力強く生きぬこうとしている二人の青年の「生へのエネルギー」が典型的に示されていると思う。またこの様に力強い「生へのエネルギー」を持っていた彼らであるがゆえに、その相即性としての「死」のあり方、「死」の意味についても考えてみたい。

透谷、彼は明治二十七年五月十六日、その生命を自らの手で断つた。「戦ふ為に生まれたる稀有の人物の一人」といわれた彼の闘争のエネルギーは晩年、その激しさゆえに消耗し尽してしまつていた。そんな中でも彼は自分の思想を退けようとはせず、かえつて彼

自身の存在をもって思想に衝突させた。「敗北」ではなく「生のエネルギー」の最後の燃焼、それが透谷の死なのではなからうか。

啄木、彼は明治四十五年四月十三日、その生命を貧困と肺病とに奪われた。啄木は貧困という身近かな問題を社会の問題、国家の問題へと広げていった。病気になっても薬も得られない貧しさ、それは個人の罪ではなく社会国家の罪ととらえ、また社会と自分とを離せないためにそんな状態を打破する手段として彼は、

「たうとう私は他の一切のものを破壊する代りに病み衰へた自分の軀を、ひと思ひに破壊する事にまで考へ及んだ。」

〔病室より〕——破壊

と自己破壊、いわゆる自殺まで考え及んでいる。彼の死の直接原因は肺病ではあるが、この文章を考えるならば、ここに先ほどの透谷との共通点を見出だす事が出来るのではないだろうか。中野重治は啄木の死について、

「天皇制国家はそれ自身の刀でこの病気の貧乏な體の小さな詩人を、うす緑色をした何かの幼虫ほどにあしらって指さきでこすり殺してしまった。」

〔啄木〕

と述べているが、啄木にしる透谷にしる、中野重治のいう通り明治の社会に殺されたとはいえ、彼らの死は新しいもの、新しい社会を呼び起こそうとする事において充分意義があるものだと思う。

思想・表現の自由を得ているにもかかわらず、社会に対して「無関心」そして何事にも「無感動」といわれる現代の私達は、私達の生が明治からの「Tan Young」=〔病室より〕——唯一つの言葉と云った叫びや二十五才・二十六才という短い生涯の中「百年の後」そして「明日」を信じた、この二人のそれに恥じない「生」であるかどうかを考えなおす必要があるのではないか。

### 第三章 自由への欲求

#### 第一節 生活と文学

啄木の評論『歌のいろいろ』の最後に「歌は私の悲しい玩具である」という後に彼の第二歌集の名前ともなった言葉がある。

啄木にとって歌は自分の生命の燃焼のすべてではなかった。しかし歌はその啄木をして

「忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌というものは滅びない。」

〔歌のいろいろ〕

「しかしいのちを愛するものはそれを軽蔑することができない。一生に二度とは帰ってこない、いのちの一秒だ。自分はその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それをあらわすには形が小さくて手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。」

といわせている、そんな存在なのである。一方『食ふべき歌』には、

「私は小説を書きかたった。否、書くつもりであった。又、実際に書いて見た。さうして遂に書けなかった。其時、丁度夫婦喧嘩をして妻に敗けた夫が理由もなく子供を叱ったり虐めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌といふ一つの詩型を虚使する事に発見したい。」

と述べ、さらに、明治四十四年一月九日の瀬川深宛書簡では、

「随つて僕にとつては歌を作る日は不幸な日だ。刹那々々の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足のない全く有耶無耶に暮らした日だ。」

と述べて、歌が便利であるがゆえに、自分の生活のもどかしさを表現する歌の存在を好むできない、そんな心情を表わしている。また同じ気持ちで、『歌のいろいろ』の中では、

「私自身が現在に於て意のままに改め得るもの、改め得べきものは僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事はばかりである。」

と述べている。

啄木は、日本における自然主義文学の「実行と観照」という隔一線の態度を、一時は実践しようとしたが、彼の貧しい生活は、家族、そして社会制度への問題意識を彼に生ぜしめ、それゆえに彼は自然主義のもつ「二重の生活」に満足できず、また社会からも彼の文学は受け入れられず、その結果、彼の願つた「小説への自由」は十分な実現を見ることができず、彼にとつて「どうでもよいような歌」のみが自由になるのである。つまり、啄木は、今の生活に満足していないがゆえに、そんな生活の有り方を歌によんでみることによつて、自己を意識し、なぐさめを得ているのである。彼にとつて「歌」とは「敗北者の玩具」であり、「悲しい玩具」という言葉は彼の無念な思いの表われといえよう。

彼の文学は、その「悲しき生涯」が生んだ文学なのであり、歌は啄木の「悲しい玩具」にすぎなかった。

## 第二節 大逆事件のとりえ方

大逆事件とは、長野県明科の職工、宮下太吉が菅野スガ、新村忠雄と明治天皇暗殺の謀議をしさらに爆裂弾を作つたという明科事件（大逆事件の本体）、幸徳秋水らが革命の謀議をしたといわれる十一月謀議、そして「皇太子をやつつける」と放言して歩いた内山愚童関係の三つの事件をつづりあわせたものといわれ、明治四十三年五月二十五日の新村、宮下の検挙に始まり、同年十月までに二十六名を検挙し、秘密裁判にかけ翌年一月には幸徳らを処刑した事件で

ある。しかしこの中の十一月謀議は根拠のないものであり、社会主義者を撲滅するために国家権力がこしらえあげた策謀であった。

この事件の被告と接触する機会を持った文学者は、弁護人として秘密裁判に立会った、平出修。平出に社会主義の知識を授け、公判第一日の特別傍聴席に姿をみせた森鷗外、そしてたまたま路上で被告を護送する囚人馬車を目撃した永井荷風の三人であるが、この事件に真正面から人民の立場で取り組んだのは啄木一人であり、啄木はこの事件に関して、「日本無政府主義者陰謀事件経過及び付帯現象」〔無題〕〔YNAROD' SERISA LETTER FROM PRISON〕「所謂所度の事」の四篇を書いている。

当時啄木は、東京朝日新聞社に校正係として勤め、又、平出修とは新詩社そして『スバル』を通じての友人であったことから直接その裁判記録や陳述書に触れることが出来たのである。

啄木がこの事件にいかにも興味を持っていたかを明治四十四年の日記において見てみると、

「六月——幸徳秋水等陰謀事件発覚し、その思想に一大変革ありたり。これよりポツポツ社会主義に関する書籍雑誌を聚む」  
(前年中重要記事)

「夜、幸徳の陳弁書を写す」

(一月四日)

という風に、実際の行動として、かなりの労力を注ぎ込んでい

それから一月十九日には、

「朝に枕の上で国民新聞を読んでいたら俄かに涙が出た。「畜生ノ駄目だノ」そういう言葉も我知らず口に出た。社会主義は到底駄目である。人類の幸福は独り強大なる国家の社会政策によつてのみ得られる。さうして日本は代々、社会政策を行つてゐる国である。と御用記者は書いてゐた。」

と時代閉塞の現状に怒りを表わし

「我々は文学本位の文学から一足踏み出して「人民の中」に行きたいのであります。」  
(明治四十四年八月十四日)

と国家権力に抵抗する方法として「人民の中へ」行こうとしている。しかしこの実践は、その志が遂げられなまま、病に倒れてしまふのである。

大逆事件から得た「社会への眼」は啄木に今まで漠然としていた現実改革の方向を定めしめ、また「一切の思索を禁じようとする帯剣政治家の圧制」への挑戦を宣言させるのである。

### 第三節 明日の考察について

貧困・病氣・「家」の問題と、個人の自覚に目醒めた啄木は、大

逆事件によってその対象たる社会へ眼をむけ、そして敵である「強権」国家権力」の存在と、それに抵抗する事をしない純粹自然主義について考へて行く。そこから生まれたのが『時代閉塞の現状（強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察）』である。

「斯くて今や我々には自己主張の強烈な欲求が残つてゐるのみである。自然主義發生当時と同じく、今猶、理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失つた状態に於て、長い間鬱積した其自身の力を独りで持余してゐるのである。既に断絶してゐる純粹自然主義との結合を今猶意識しかねてゐる事や、其の他すべて今日我々青年が有つてゐる内訥的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき状態を極めて明瞭に語つてゐる——さうしてこれは實に「時代閉塞」の結果なのである。」

啄木は、自然主義文学は理想が無いまま、強権の下で現状をそのまま認めてしまつてゐることを述べ、さらに「未来」を奪われ自滅への道を歩みつつある現状に対し、彼は主張する。

「斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時機に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない。實に必至である。我々は一斉に起つて先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対

する組織的考察に傾注しなければならぬのである。」

ここにおいて彼は「明日の考察」を述べている。それは強権の支配する様な時代に没入することない、また批判の出来る「明日」を意味する。そして彼は今後の方針として、

「一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一の真実——「必要」！これ實に我々が未来に向つて求むべき一切である。我々は今最も嚴密に、大胆に、自由に「今日」を研究して其処に我々自身にとっての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確實なる理想である。」

と主張する。

ここにおける「必要」という言葉について中野重治は、

「それは實に『必然』以外の何ものでもない。必然こそ最も確實な理想である。」

（『啄木に関する断片』）

として必要と必然を置き変へこいる。それに対し、国崎望久太郎は、

『必要』とは彼の内的な要求、主体が主体として自己を確立するために祈求されたものであった。この『必要』を社会的な

『必然』であるとした中野重治氏の解釈は誤解である。」

（『啄木論序説』）

と批判している。「必然」はその相反するところの語として「偶然」があげられていることから考えても少なからず客観性を含むものと思われる。しかしこの「必要」は、「最も確実なる理想」である。国崎望久太郎のいう様に、主体的な祈りを含めた様な「必要」と私は解釈したい。

透谷が「請ふ刮目して百年の後を見ん」（『明治文学管見』——精神の自由）と述べたが、その百年を待たずして、同じ明治の末期において、啄木が「時代塞閉の現状」に気付き、「明日の考察」を導き出したこと、そして「明日の考察」に傾注することによって、時代の矛盾を生きぬく精神。それはまさしく「自由への欲求」であり、明治の若者たる啄木にふさわしい精神であるといえよう。

## おわりに

私の好きな詩の一つに高村光太郎の『道程』がある。

『道程』

どこかに通じてゐる

大道を僕は歩いてゐるのぢやない

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

道は僕のふみしだいて来た足あとだから

道の最端にいつでも僕は立ってゐる

何といふ曲りくねり

迷ひまよつた道だらう

自堕落に消え滅びかけたあの道

絶望に閉ぢ込められたあの道

幼い苦悩にもみつぶされたあの道

ふり返つてみると

自分の道は戦慄に値する

四離滅裂な

又むざんな此の光景を見て

誰がこれを

生命の道と信ずるだらう

啄木の生涯はこの詩に共通するところが多い。この詩は、明治十六年生まれ、啄木より三歳年上の光太郎が大正三年に書いた長詩である。彼もまた、明治の青年"なのである。

明治、その後半は「冬の時代」とも呼ばれ、ともすれば時代の波におし流されてしまう様な荒々しい時代だった。そんな中で、啄木の力強く生きようとした姿とその鋭い眼での正しい社会認識にあらためて魅かれる思いがする。

この論文は、明治の青年としての啄木像にテーマをおいて展開していくつもりだったが終ってみると、表面的な浅いとらえ方しか出ていない事に、そして文章の運び方の拙さに深く反省している。

透谷との比較も不十分であるし、また近代文学史の中における啄

木の位置や新聞記者としての啄木、そして節子と関連して彼の生活や思想を考察していくことなど、これからの私の課題はまだ多々と思っている。

### 参 考 文 献

- 。石川啄木全集―全八巻
- 。大逆事件―荒畑寒村、大逆事件への証言
- 。文芸読本「石川啄木」
- 。石川啄木 碓田のぼる著
- 。文芸読本・石川啄木 荒正人編
- 。若き石川啄木―その作品と思想 岡邦雄著
- 。北村透谷論 小田切秀雄著
- 。文芸―石川啄木読本
- 。現代詩読本 石川啄木
- 。革命伝説―大逆事件の人びと 4 神崎清著
- 。啄木論序説 国崎望久太郎著
- 。石川啄木伝 岩城之徳著
- 。透谷像構想序説△伝統▽と△自然▽津田洋行著
- 。啄木 中野重治著
- 。日本文学研究資料叢書―石川啄木
- 。日本文学研究資料叢書―北村透谷

### 〔評〕

すつきりとした啄木論である。啄木像の骨格がしつかりとらえられている。岡邦雄氏のいう「民族の明日の生活への予見」、それは明日の社会をめざす理想主義精神とも言えようが、透谷・荒村・啄木に通ずるところであり、岡田さん憧憬の「明治の青年」の本領だ。啄木の評論を土台に、日記・書簡・参考文献を参照、それからの短い引用も、適確鮮明である。終章で、「明日の必要」を、「自由への欲求」ととらえた結論は、鋭く、新鮮である。短歌・詩・小説などの面からの肉付けもできるだろうが、一番の肉付けとなるのは、岡田さん、「自分の道」を進む昭和の青年貴嬢の今後の人生だと言えましよう。折角健闘を祈ります。

(天 野 茂)